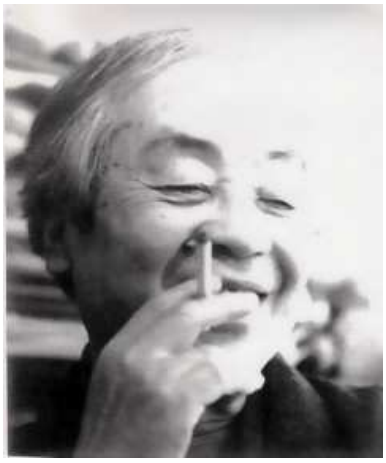
【 まるやま　かおる 】

丸山　薫

１８９９（明治３２）年～
１９７４（昭和４９）年

日本の現代詩に多大な業績を残した詩人。
韓国の警視総監や島根県知事を勤めるほどの高級官僚だった父親の仕事の関係で幼少の頃からあちこちを点々とする。
12 歳のときに豊橋市に住む母方の祖父の家に移った。
49 歳の時再び豊橋の地に移り、75 歳で亡くなるまで、豊橋市を中心に活躍していた。（多米町蝉川 33 番地）



丸山　薫

『丸山薫詩集』
丸山薫／著　　西谷操／発行

生い立ち

1899（明治 32）年、大分市荷揚町の県庁官舎で、父重俊、母竹子の二男として生まれた。父が官僚であったためあちこちの官舎を転々とし、5 歳の時には韓国・京城にも渡ったことがある。

しかし、1911（明治 44）年に父が病気で亡くなったため、母方の祖父の家がある豊橋市に移り、2 学期から八町小学校に通学した。小学校だけでも 5 校も変わったため、なかなか友達ともその地域にも馴染めなかったという。

練習船

海の好きな少年（こども）らは
いつかは練習船に乗るであろう
バナナの実る南の島へ
風に翼張りとんでゆくであろう
恋することを忘れた一生を
波のまにまに送るであろう
やがてロビンソンのように年老いてから
人形のような乙女を娶（めと）るであろう

海への強い憧れ

その後、愛知県立第四中学校（現時習館高校）に入学してから、米窪太刀雄の『海のロマンス』を読んだ薫は、海や船へ強い憧れを抱くようになった。そのため、中学を卒業後東京高等商船学校（現東京商船大学）を受験したが失敗、翌年再度挑戦して入学することができた。しかし、病気のためやむなく退学することとなった。

夢破れ三高へ

傷心の薫は、自分の進むべき方向を失い、しばらくあてもなく過ごしていたが、やがて母の勧めもあって 1921（大正 10）年、第三高等学校（現京都大学）に入学。そこで知り合ったのが三好達治や桑原武夫らであり、特に三好達治とは親密となった。

その後、東京帝国大学国文学科に入学したが、当時のことを『全詩集大成現代日本詩人全集 11』の中で次のように記している。

“作品を書き始めたのは高等学校卒業前 1 年のころからで、当時、一高出身の東大生によ

高師緑地内にある丸山薫の碑

っておこされた第九次「新思潮」に参加して、約2カ年にわたってロマンティックな短い散文のいくつかを発表した。小説のつもりで書いたのだが、同人仲間からも世間からも詩としてしか認められず、自分でも気付くところがあって、同様のモチフを詩の形式にして、たまたま百田宗治氏の主宰する詩誌『椎の木』に発表しつづけた。後に『幼年』という詩集に収めた作品がそれらである。”

1932（昭和7）年、33歳のときに出した第一詩集は、『帆・ランプ・鴎』といい、海に憧れた詩人にふさわしいものであった。その詩の中にあふれた薫の心は、多くの人々を感動させ、詩人として名を知られることとなった。

その後、堀辰雄や三好達治らと雑誌「四季」を発刊。ここに次々と詩人たちが加わり、ついには昭和の新しい詩を起こす大きな集団となった。（『愛知に輝く人々4』より）

1945（昭和 20）年山形県の月山のふもとの岩根沢という所へ疎開、そこで教師となった薫は、自然や子どもたちと触れ合う中で、その喜びを詩に綴った。

豊橋市にて

1948（昭和 23）年、再び豊橋に家を移して愛知大学の講師（後に教授）となり、やがて多くの人に惜しまれながら75歳でその一生を終えるまで、詩の創作はもちろん、講演活動や放送関係への出演など大活躍であった。

豊橋市では、薫の業績を記念して1994（平成6）年「丸山薫賞」を設立し、毎年現代詩集を公募してその優秀作品に授賞している。

母の傘

お母さん
あなたが亡くなられてから
きょうで二十日目
山の村には侘しく
秋の雨がふっています

その雨の中を
あなたが形見として遺された
あの小さな傘をさして
私は生活のために出かけます

年寄られてから
いつも外出には手から離し給わず
はるばるとこのさびしい北の山国まで
死出の旅にさして来られた
老人用の黒い絹張りの傘！

お手製のふくろにしまわれた
少女のパラソルのように
柄の短いコウモリ傘！

それを翳せば
雨も私の頭と肩にはふらず
私はあなたと一緒にいるようです

そのうえ　未だ私が子供で
あなたが若かったむかしから
媼となって　ひっそりと暮されるまで
始終　私達の気持に投げかけていた

あの柔かな慈愛の陰にかくれるようで
私の胸はせつなく温まり
甘い思い出にうるむのです

お母さん
私はいま　この小さい傘の中から
現世にしぶく冷たい雨の脚を眺め
雨にけぶる遠い山の紅葉を眺めます

代表作品

著書名	刊行年	著書名	刊行年
帆・ランプ・鴎	1932（昭和 7）年	丸山薫詩集	1943（昭和 18）年
鶴の葬式	1935（昭和 10）年	みなみの海	同上
幼年	同上	水の精神	1947（昭和 22）年
蝙蝠館	1937（昭和 12）年	蟻のいる顔	1973（昭和 48）年